

夕霧卷試論

——「名」の輻輳する物語——

阿部哲也

はじめに

夕霧卷はこれまで、夕霧に与えられた「まめ人」⁽¹⁾という人物評と、落葉宮の持つ皇女という属性⁽²⁾に着目した研究をはじめとして、歌言葉などの表現についての考察⁽³⁾や竹取引用の観点⁽⁴⁾などから、様々に研究が重ねられてきた。しかしなにより、前後の巻々と時間的には連続しながら、内容はやや挿入的であるというこの巻の特質ゆえに、巻の成立そのものに疑義が呈され⁽⁵⁾、物語第一部⁽⁶⁾や第三部⁽⁷⁾との承接の在り方が検討され続けた研究史上の重要な経緯を見逃すことはできない。研究者たちは、「夕霧卷の存在自体をどのように説明づけるか」という大きな問いに、絶えず立ち向かい続けてきたのである。

この問いに対しては、これまで、夕霧と落葉宮の恋が、光源氏や紫上の半生を相対的に浮き彫りにしているとの見解⁽⁸⁾や、物語第三部の薫と大君の物語の先蹤と捉える見解⁽⁹⁾などが提示されて来た。物語第一部と第三部の、まさに「結節点」⁽¹⁰⁾とも言うべきこの巻の特徴を看破してみせた諸研究の功績は大きい。しかし、その「結節点」たる特徴を認めるばかりでなく、夕霧卷の展開それ自体に、独自性を見出すことはできないのであろうか。

夕霧卷の研究史においては、夕霧卷の随所に和歌的表現が散見されるところに、その独自性が認められてきた。小町谷照彦氏は、夕霧卷にみえる和歌・引歌・歌語のもつ、滞りがちな夕霧の恋の進展を促す効果について言及しており⁽¹¹⁾、また、室伏信助氏は、そうした和歌的表現と対極の性

質をもつ物語として夕霧の恋はあるのだと述べている。¹²⁾しかし、巻の展開に、より直接的な影響を与えられるということであれば、和歌的表現以上に、巻の随所にみられる多種多様な〈噂〉の存在を挙げるべきではないだろうか。

例えば、巻の展開に最も影響を与えた噂として、律師の密告が挙げられる。夕霧と落葉宮の間は実際には潔白であったために、律師の密告は、事実誤認以外の何物でもないわけだが、もののけに苦しむ一条御息所を精神的に追い詰める過程において、その真偽のほどはあまり問題にならない。寧ろ、誤認であることが、母や致仕大臣への発覚を恐れる落葉宮の懊悩を募らせることに多大な効果を發揮していると思しい。

また、夕霧巻に登場する人物の多くが噂を強く気に掛ける存在である点も見逃せない。例えば、落葉宮には、「人のもの言ひ」を気に掛ける二例（四一〇〇、四一〇二）、夕霧との噂を母一条御息所が「漏り聞く」ことを恐れる三例（いずれも四一〇二）をはじめとして、〈噂〉を気に掛ける場合が非常に多い。そのことは、夕霧についても同様で、小野に逗留することを決めた際、夕霧は「かるくしきやうに人もとりなすべし」（四九五）と警戒心を強め、落葉宮を口説く際も、「世のもどき」（四一四〇）を生じさせないよう気

を配っている。人物たちが気に掛けざるを得ない大きな力として、〈噂〉は夕霧巻に存在している。

そして、そうした〈噂〉の存在感の大きさと呼応するかのように、夕霧巻には「名」という語が数多く見られる。『岩波古語辞典』は「名」を「物・人・觀念を他と区別するために呼ぶ語。なまえ。」「名目。」「世間への聞え。評判。」と、その意味を三つに分類するが、夕霧巻にみえる「名」の用例全一八例には、例えば、「なまえ。」の意にあたる「業平が名」（総合（一）七七）のようなものは皆無であり、いずれも「世間への聞え。評判。」と解すべきものである点に注目したい。そしてまた、その「名」に言及、或はその「名」について言及される人物が、落葉宮、夕霧、一条御息所、雲居雁、朱雀院、光源氏と多岐に亘っているのも見逃すことのできない特徴である。夕霧巻の主要人物たちは、皆共通して「名」に対して何らかの意識を抱き、発言ないし思念している。

はやく岩原真代氏がこの夕霧巻の「名」に関する論考を発表している。¹³⁾氏は、落葉宮の「名」を脅迫的に言い立てることで宮を意のままにしようとするとする夕霧の狡猾な手口や、「名」と実体との乖離に苦しむ落葉宮の有り様について明らかにしている。岩原氏の見解は、夕霧巻の「名」

について考察する上でまず参考にするべきものではあるが、一方で、夕霧や落葉宮に留まらず、光源氏や雲居雁などの用例をも視野に含めた、総体的な「名」の理解が求められよう。

『源氏物語』における「名」の研究には、「光源氏」という「名」の語構成に目を向ける論^⑮と、「光源氏」という「名」が周辺人物に取沙汰されることの意味を考える論^⑯の、大きく分けて二通りの論調があるが、先に述べた夕霧巻における「名」の特質について考えるためには、「名」に対する人物たちの意識の在り方についても、併せて考察する必要がある。そこで本稿では『源氏物語』に登場する人物たちの「名」に対する意識にも触れながら、落葉宮と夕霧の用例を中心に、夕霧巻における「名」について考察したい。

一、「名」に対する女君たちの意識

夕霧巻において、「名」について最も多く言及されるのは、落葉宮である。彼女自身が自己の「名」に言及する用例は三例、逆に他者から言及される例は一〇例と、夕霧巻にみえる全一八例のうちの大半を占めている。この特徴に迫るためにも、まずは『源氏物語』に登場する女君たちの「名」に対する意識について考察したい。

自らの「名」について思念する、あるいは言及する女君には、空蟬、藤壺、六条御息所、朧月夜、玉鬘、花散里、雲居雁、落葉宮が、そして、作中の他者から「名」に言及されるのみの人物に、未摘花、兵部卿宮娘の中君、女三宮などがある。主要な人物を中心に、以下、具体的に検討していこう。次に挙げるのは、未摘花の「名」にまつわる全二例である。

① くれなるのひと花ごろも薄くともひたすら朽たす名
をしたてずは

(未摘花(一)二三〇)

② 人のほどの心ぐるしきに、名^①の朽^②ちなむはさすがなり。

(未摘花(一)二三〇)

①は、たとえあなた様のお気持ち^①が薄くとも未摘花様の「名」だけは立てないでほしいと光源氏に訴えかける大輔命婦の歌、②は、①の歌をうけて光源氏が、未摘花の身分に配慮して、未摘花の「名」が落ちるのも気の毒だと思う例である。傍線を付した通り、未摘花の用例は、「朽つ」「朽たす」といった動詞が併用されている点が特徴的である。この「朽ち」ることの危惧される未摘花の「名」とは、②の「人のほど」(未摘花の身分)という言葉から分かるように、宮家の血筋に由来する評判、つまり〈家名〉の意と解してよからう。では①の「朽たす名」はどうかといえ、一見

②と同様に解して良いようにみえるが、しかし「朽たす名を立つ」という構成は、〈家名〉を地に落とすような「名」が世に流布すること、と解するのが自然であるから、ここは〈悪評〉の意と取るべきだろう。つまり、末摘花の「名」には、自らの背負う高貴な〈家名〉と、それが地に落ちることと生じる〈悪評〉の二つの意味合いがあることがわかる。

こうした意味の二面性ともいうべき特徴は、六条御息所の「名」についても当てはまる。六条御息所の「名」には、「大方の世につけて、心にく、よしある聞こえありて、昔より名高くものし給へば」(葵(一)三一七)と語られるような、その奥ゆかしさに対する評判の意があるが、それはもとを辿れば、

かく院にも聞こしめしのたまはするに、人の御名も我ためも、すぎがましういとほしきに、いとゞやむごとなく心ぐるしき筋には思きこえ給へど、まだあらはれてはわざとてなしきこえ給はず。

(葵(一)二九一)

と、光源氏に「やむごとなく心ぐるしき筋」であると氣遣われるような、前東宮妃という高貴な身分に由来する評判、つまり〈家名〉に端を発するものであると考えられる。「人の御名の朽ちぬべき事」(葵(一)三二五)と、光源氏にその「朽

ちる」ことが危惧される「名」も、末摘花の場合と同様、〈家名〉である。一方で「つひにうき名をさへ流しはてつべきこと」(葵(一)三一七)、「あはくしうき名をのみ流して」(葵(一)三四七)と、生霊事件に由来する「名」が「流」れることへの危惧、あるいは既に「流」れてしまったことへの悲嘆が描かれている場合などは、〈悪評〉と解するべきだろう。以上のことから、末摘花と同様、六条御息所の「名」も〈家名〉と〈悪評〉の二面性を抱え持つものと見做し得る。

また、既に立っている〈悪評〉にさらなる〈悪評〉を取り重ねることへの危惧が描かれる女君もいる。空蟬がそれにあたる。光源氏に「あながちに名をつゝむ」(空蟬(一)九〇)女君として見做される彼女だが、それは「かろくしき名さへ取り添へん身のおほえ」(帚木(一)七四)、すなわち、光源氏との関係を築くことによって、世に拡散されかねない〈悪評〉を空蟬自身身に掛けていることに原因がある。ここで一つ、「さへ取り添へん」という表現に注目したい。これは、光源氏との軽薄な「名」が「取り添ふ」以前に、空蟬の「身」に何らかの「名」が既に備わっていることを意味しているが、おそらくその「名」とは、

数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆるは、木々

(帚木(一)七六)

と空蟬自身歌い上げるような、落ちぶれた生活に甘んじる
他ない現状の身の上に対する〈悪評〉のことを指すのだろ
う。空蟬は〈悪評〉に〈悪評〉を重ねることを恐れて、光
源氏をさげようとするのである。しかしなぜ空蟬はこま
で「名」を気に掛けるのか。それは、直接「名」とは表現
されていないが、末摘花や六条御息所と同様に、空蟬にも
一定の〈家名〉としての「名」の意識があつたからだと思
えられる。源氏の手から免れようとする際、彼女は「あり
しながらの身にて、かゝる御心ばへを見ましかば、あるま
じきわが頼みにて、見なほし給ふ後瀬をも思ひ給へ慰めま
しを」（帚木（一六九）と、「かつての身分のままであれば、わ
たしに対するあなたの扱い方が好転する将来を期待して心
を慰めることもできたであろうに」との恨み言を源氏に告
げる。ここにみえる「ありながらの身」とは、かつて出
仕する噂が立った程には将来性のあつた、彼女の出自のこ
とに他ならない。つまり、既にその地位は失われてしまつ
てはいるものの、空蟬にも「家名」としての「名」の意識
は根強く残っていると考えられるのである。光源氏との交
渉を拒む一つの理由に彼女がしばしば身分の相違を挙げる
のもその意識のあらわれといえよう。

これまでの「名」の分析を通してわかつたことは、

・「名」に対する女君の意識には、〈悪評〉と〈家名〉の
二面性があるということ。
・女君によつては、〈悪評〉に〈悪評〉が重なることを恐
れる場合があるということ。

・〈悪評〉を恐れる女君は、おおむね潜在的に〈家名〉
を意識する場合が多いということ。

の三点であるが、それに加えて、〈悪評〉としての「名」が、
当事者である女君にも、第三者である男君や女房たちにも
取り沙汰されるのに対して、〈家名〉としての「名」は、第
三者にしか取り沙汰されないという傾向があることも挙げ
ることができよう。〈家名〉を背負う女君たちは〈悪評〉
を気にする場合に限って、自己の「名」に言及するのであ
る。

二、「名」に対する落葉宮の意識、あるいは落葉
宮と「名」との関係性

では、落葉宮はどうか。以下は、「名」に対する落葉宮の
意識が語られる全三例である。

①われのみやうき世を知れるためしにて濡れそふ袖の
名を朽たすべき
(夕霧四九九)

②げにこの御名のたけからず漏りぬべきを、心の問は

むにだに口きよう答へんとおぼせば、いみじうもてはなれ給。
(夕霧四一〇一)

③人の言によりていかなる名を朽たさまし、などすこしおぼし慰むる方はあれど、かばかりになりぬる高き人の、かくまでもすゞろに人に見ゆるやうはあらじかし、と宿世うくおぼし屈して、……
(夕霧四一〇八)

①は未亡人でありながら浮いた噂を世に流してしまふことで、我が「名」を更に「朽た」してしまふことを危惧する歌、②は夕霧との「名」が世に「漏」れ出るとしても、自分の心のうちでは潔白であり続けようとの決意、③は人の言動などで自らの「名」を「朽たさ」ずにいようとしながらも、一方で同等の身分の人はきつとここまで男性に見えることはないだろうに、と自らの宿世を嘆く様子である。

①・③にみえる「朽たす」「名」とは、③で落葉宮自身が「かばかりになりぬる高き人」と自己の身分について言及していることから分かるように、末摘花や六条御息所と同様、高貴な血筋に由来する〈家名〉の意と捉えてよからう。一方で②の「漏りぬべき」「名」とは、夕霧との交際の末に立つ〈悪評〉のことを指す。

加えて、①の「濡れそふ袖」という表現は、「名」を「取り添へん」ことを恐れる空蟬の意識と近しい性質のものと

いえる。落葉宮の場合のこの表現は、皇女でありながら柏木と結婚したことに対する〈悪評〉に、夕霧との〈悪評〉が取り重なったものと考えられる。すなわち、落葉宮は、皇族出身者としての〈家名〉(①・③)、皇女不婚の原則を破ったことによる〈悪評〉(①)、そしてまた新たに世に喧伝される夕霧との〈悪評〉(②)の三つの「名」を背負っているのである。

また、落葉宮の「名」の意識の中で最も特徴的なのは、落葉宮自身が〈家名〉としての自らの「名」に言及する点である。これは第一節でみた女君の「名」に対する捉え方とは明らかに異なる特徴である。このことは、落葉宮が自己の〈家名〉に対する他者の意識をそのまま取り込んだこととの現われとは考えられまいか。なぜなら、「はじめに」で述べたように、自分の〈噂〉が立つことを強く気に掛ける性格の持ち主である落葉宮は、既に噂された内容をことのほか重視する傾向を有していると考えられるからである。そして、落葉宮がそうであるならば、こうした「名」に対する落葉宮の意識は、多分に他者からの評価に絡め取られた、主体性の希薄な意識と言うことができるだろう。②「心の間はむにだに口きよう答へん」や③「人の言によりていかなる名を朽たさまし」とあるように、落葉宮は強い意志

をもつて自らの「名」を保持しようとしている様でいて、しかし、人目を意識して突如不安に駆り立てられる③後半部での様子から分かるように、実情としては、自らの「名」の重圧に押しつぶされそうになっているのである。

また、落葉宮の「名」は、その両親たちの心配の種でもあった。親の、娘の「名」に対する考えが描かれるのも、他の女君にはない、落葉宮の「名」ならではの特徵といえる。以下は、一条御息所が落葉宮の「名」を気に掛ける例である。

④け高うもてなしきこえむとおほいたるに、世づかしう、かるくしき名の立ちたまふべきを、をろかならずおほし嘆かる。
(夕霧四一〇七)

⑤人の御名をよさまに言ひなほす人はかたきものなり。
(夕霧四一〇九)

④は娘をその気高さのままに世話しようと思っていた矢先、夕霧によって軽薄な「名」が「立」ってしまったことを悲しむ様子、⑤は、④から一転して、一度流れた噂が好転することは無いとの現実的な判断を下す様子である。注目すべきは④から⑤への変転の様である。母は、娘に風聞が立ったことを嘆き続けるより、むしろ現状において、最も有効な策を講じようと考えるわけだが、これは父朱雀院

にも共通してみられる態度であった。

⑥後見なき人なむ、中／＼さるさまにてあるまじき名を立ち、罪得がましき時、この世、後の世、中空にもどかしき咎負ふわざなる。
(夕霧四一三五)

⑦この浮きたる御名をぞ聞こしめしたるべき。
(夕霧四一三五)

娘の風聞を聞きつけた⑦朱雀院は、出家してそのまま小野で暮らすことを願う落葉宮に対して、⑥のように、後見がいなければかえって「あるまじき名」が立ちかねないとして、その出家を禁ずる。この言葉は、かつて女三宮の処遇を巡って発した以下の発言を受けるものと思しい。

頼む陰どもに別れぬる後、……昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、けふはなほ／＼しく下れる際のすき者どもに名を立ちあざむかれて、亡き親の面を伏せ、影をはづかしむるたぐひ多く聞こゆる。
(若葉上三二七―二一八)

親を喪った皇女に懸想することは、かつて「世にゆるさるまじき」(同)行為と見做されていたが、今は、中途半端な身分である「すき者ども」にその「名」を貶められ、亡くした親の面目を潰すような事態になりかねないと考えた朱雀院は、当時、光源氏に女三宮を降嫁させることを決意

した。過去にこうした発言をしている朱雀院が、将来「すき者ども」から辱めを受けかねない、山に籠るといふ選択をした落葉宮の決断に承服できないのも無理はない。思えば、夕霧の手から逃れるべくなされた出家の決断は、落葉宮の取ったはじめの主体的な行動であった。これは奇しくも「常の御けはひよりはいとおとなび」（柏木四一三）た様子で出家を望んだ妹、女三宮と同じ軌跡を辿っている。当時の朱雀院は、女三宮の出家願望を受け入れたが、この度は、落葉宮に光源氏の如きしかるべき後見がないことを理由に、あらぬ「悪評」が立つことを恐れて、彼女の願いを無下にしてしまう。必死の願いにも拘わらず、「名」に阻まれてしまう点に鑑みても、やはり落葉宮の人生は「名」に絡めとられたものであると言わざるを得ないのである。

以上、娘・母・父の三者の「名」に対する意識を見てきたが、興味深いのは、「家名」としての「名」に最後まで固執するのは娘だけで、母と父はむしろ「悪評」としての「名」が立つことを未然に防ごうとする点である。そして、母は現状を打開すべく、父は将来生じ得る事態を未然に防ぐべく娘に苦言を呈するわけだが、それがかえって、「名」の呪縛から抜け出そうとする落葉宮を更に縛り付けている点は見逃すべきではなからう。

三、夕霧巻頭部の「名」

次に夕霧にまつわる「名」の用例を見ていく。本節では、これまでとは少し見方を変えて、暫く巻頭部にみえる夕霧巻の「名」の初例に焦点を当てて考察をしたい。

まめ人の名を取りてさかしがり給大将、この一条の宮の御ありさまをなほあらまほしと心にとめて、大方の人目にはむかしを忘れぬ用意に見せつゝ、いとねんごろにとぶらひきこえ給。下の心には、かくてはやむまじくなむ月日に添へて思ひまさり給ける。……はじめよりけさうびても聞こえ給はざりしに、ひき返し懸想ばみなまめかむもまばゆし、たゞ深き心ざしを見えたてまつりて、うちとけ給をりもあらじやは、と思ひつゝ、さるべきことにつけても宮の御けはひありさまを見給。

（夕霧四八九）

この巻頭表現に関する先行研究は数多い。「大方の人目」を気に掛けながらも、「下の心」ではしたたかに恋情を募らせる夕霧の情況に目を向ける伊藤博氏の論や、「かくてはやむまじくなむ」という行動性の付与に、「この巻特有の錯綜した人間関係」を生み出す発端としての役割を見出す小町谷照彦氏の論などはその代表的な指摘である。先行する

巻々で、「わざとけさうびてはあらねど、ねんごろにけしきばみて聞こえ給」(柏木四四二)、「まほにはあらねど、うちにははしおきて出で給」(横笛四五六)などと語られるように、夕霧は、あくまで柏木の遺託を守ろうとする自制的な恋心を貫いてきたわけだが、夕霧巻に入って、彼は、その恋を成就させるべく、本格的に行動に乗り出しはじめる。光源氏が壮年期に達した今、まるで物語は、新たにその息子の恋を始発させようとしているかのようなのである。

しかし、こうした印象も強ち的外れではないのではない。ここでやや唐突の感はあるものの、光源氏の恋が本格的に始発する帚木巻の巻頭の辞を見てみたい。

光源氏名のみことくしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとゞ、かゝるすぎごとどもを末の世にも聞き伝えて、かろびたる名をや流さむと忍び給ける隠ろへごとをさへ語り伝へけむ人の、もの言ひさがなさやよ。(帚木(一)三二)

帚木巻頭、光源氏の恋が本格的に語り出されるにあたって、既に「光源氏」という「名」が世に喧伝されていることが明らかにされる。この「光源氏」という「名」については、神話的な英雄像を彷彿とさせる「光」と、帝位に就くことが許されない臣下をいう「源氏」とで構成された「きしん

だ名」である点に主人公の特異性を見る論⁽¹⁾や、そうした特異性を持ち合わせながらも、「名」はあくまで評判として世に流布する他ないという、社会的現実⁽²⁾に絡めとられた彼の一面に目を向ける論など、種々検討がなされているが、いずれも光源氏の物語の主人公としての独自性、卓越性を明らかにする、という点で一致している。

その登場とともに「名」が語られる人物は光源氏に限らない。匂宮巻頭の薫と匂宮の場合がそうである。ともに匂宮巻以前から物語に登場しているが、物語第三部劈頭、彼らは恋の主人公として新たに語り直されながら登場する。

当代の三宮、そのおなじおとゞにて生ひ出で給し宮の若君と、此二所なんとりくきにきよらなる御名をとり給て、げにいとなべてならぬ御有さまどもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。(匂宮四二二)

薫と匂宮は、光源氏の「まばゆ」さには劣るとされながらも、「きよらなる」「御名」で世に迎えられるながら物語に登場する。これは帚木巻頭の光源氏の場合と全く同じあり方と言えよう。思うに、『源氏物語』は「名」の喧伝とともに人物を登場させることを、恋物語の主人公を描き出す上での一手法として認識していたのではないか。もしそうであ

れば、「光源氏」「薫」「匂宮」があだ名であるのと同様、夕霧における「まめ人」も一種のあだ名に類するものだとも言え、「名」を伴う夕霧の登場についても、まずはこれらに類するものと見做して考えてみる必要があるだろう。⁽²³⁾

いや、むしろそうであるからこそ、夕霧に付された「名」が「まめ人」であつたのではなからうか。つまり、巻頭で「まめ人」という「名」が夕霧に付されたことは、夕霧巻が正統な恋物語をもどく物語であることの宣言と見做してしかるべきなのではなからうか。

そして、夕霧巻がもどく物語といえ、光源氏のそれに他ならない。表現の位相においても、夕霧巻と帚木巻では共通するところは数多く、例えば、思いを遂げようとするも、障子を隔てて抵抗する落葉宮に難色を示した夕霧の言葉「世中をむげにおぼし知らぬにしもあらじを」(夕霧四九八)は、「なよ竹」のごとく抵抗する空蟬に放った光源氏の言葉「むげに世を思ひ知らぬやうにおぼはれ給なんい」とつらき」(帚木(六九))を彷彿とさせるものであるし、光源氏が夕霧と対面した際の、夕霧の美貌を称える言葉「鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかに物きよげ」(夕霧四一四三)も、光源氏に感じた空蟬の印象「鬼神も荒だつまじきけはひ」(帚木(六七))と大変似通った表現といえる。「その際／＼

をまだ知らぬうひ事ぞや」(帚木(六八))、「ゆくりかにあざれたることの、まことにならはぬ御心ち」(夕霧四一〇〇)と、自らの恋愛経験の乏しさに言及する点も両者共通するところである。

このように、夕霧巻の表現には、帚木巻の光源氏のあり方に似通う場合が多々あるが、一方で、噂の露見が心配されたり、次節でみるように、女君の「名」を問い詰めたりする姿勢は帚木巻には描かれない。これは、帚木巻での光源氏の恋と夕霧巻での夕霧の恋との違いの一つと見做してよいものだろう。そこで次節では、光源氏の恋をもどきながらも「名」に固執する物語として夕霧の恋が語られることの意義について、考えていきたい。

四、夕霧の変貌と光源氏の願望

「名」に対する夕霧の意識は、岩原真代氏が述べるように、その落葉宮の「名」を責め立てる点に大きな特徴がある。

① 大方はわれ濡れ衣を着せずとも朽ちにし袖の名やは隠る、
(夕霧四九九)

② せくからに浅さぞ見えん山河の流れての名をつ、みはてずは
(夕霧四一〇〇)

①は、柏木との結婚で既に「名」が地に落ちたものとして、

落葉宮の〈家名〉を責め立てる歌、②は、既に露見した〈悪評〉はもう取り返しがつかないのに、依怙地になって夕霧を拒絶し続ける落葉宮の態度を非難する歌である。〈家名〉と〈悪評〉の両面から、夕霧は落葉宮を追いつめていく。舞台を小野山荘から一条邸に移すと、そうした夕霧の追いつめ方は更に過激さを増していく。

③世づかぬありさまのいとうたてあり、又か、りとして、ひき絶えまららずは、人の御名いかゞはいとほしかるべき。
(夕霧四一四八)

④何のたけき御名にかはあらむ。言ふかひなくおほしよわれ。
(夕霧四一四八)

③は、私との結婚を拒絶し続けて、もし私があなたのもとを訪れなくなれば、あなたの〈家名〉としての評判はどんなに気の毒なものとなるだろうか、との意、④は、一体あなたの〈家名〉としての評判はどれほど気高きものなのであるうか、大人しく諦めよ、との意である。〈家名〉としての評判を気遣うかと思えば、非情に責め立てもするといった狡猾な手段を夕霧は臨機応変に講じるのである。

しかし、こうした「名」を問い詰める夕霧の姿勢は、落葉宮のみならず、正妻雲居雁に対しても貫かれている点に本稿では注目したい。

⑤「なる、身をうらむるよりは松島のあまの衣にたちやかへまし

なほうつし人にてはえ過ぐすまじかりけり」とひとり言にの給を、立ちとまりて、「さも心うき御心かな。

松島のあまの濡衣なれぬとて脱ぎかへつてふ名を立ためやは」

うち急ぎて、いとなほくしや。
(夕霧四一四六)

⑥なだらかの御いらへや。言ひもていけば、たが名かをしき。
(夕霧四一五二)

⑤で夕霧は、長くあなたに連れ添った我が身を恨むよりは、いっそのこと出家してしまおうか、と嫉妬心を露わにする雲居雁の歌に対して、私のことが飽きたからといって、私を見捨てたという〈悪評〉があなたに立っても良いのか、との歌を返す。また⑥では、夕霧の心変わりに憤慨して里邸に下がつてしまった雲居雁に対し、「身勝手な振る舞いをして、それであなたの〈家名〉としての評判が惜しくないのか」とその軽率な振る舞いを非難する。これらの例は、夕霧が「名」と関わりの深い落葉宮に限ってその「名」を責め立てているのではなく、夕霧自身に、他者の「名」に言及する性格があることを教えてくれる。

しかし一体なぜ、夕霧はここまで「名」にこだわるうと

するのか。夕霧が自己の「名」について言及する以下の叙述が、その手がかりを与えてくれるだろう。

むかしより、御ために心ざしのおろかならざりしさま、おとゝのつらくもてなしたまうしに、世中のしれがましき名を取りしかど、たへがたきを念じて、こゝかしこす、みけしきばみしあたりを、あまた聞き過ぐしありさまは、女だにさしもあらじとなむ人ももどきし。いま思ふにも、いかでかはさありけむと、わが心ながらいにしへだにおもかりけりと思ひ知るゝを、……

(夕霧四一四五—一四六)

「しれがましき」「名」とは、「まめ人」の「名」のことだろう。なぜなら、「こゝかしこす、みけしきばみしあたりを、あまた聞き過ぐ」と、他所からの求婚を退ける姿勢は、次にあげる光源氏の発話、

中納言は、もとよりいとまめ人にて、とし比もかのわたりに心をかけて、ほかさまに思移ろふべくも侍らざりけるに、その思ひかなひては、いとゝゆるぐ方侍らじ。

(若菜上三二二四)

にみえる正妻一筋な夕霧の「ほかさまに思移ろふべくも侍らざりける」様子と対応するためである。夕霧が「まめ人」というあだ名に以前から嫌悪感を抱いていたことがここで

明かされるのである。

しかし、これは、夕霧巻頭の「まめ人の名をとりてさかしがる」夕霧の様子と齟齬をきたす叙述ともいえる。「さかしがる」と評したのはあくまで物語の語り手であるから、これを当人と第三者の認識の相違と見做すことも可能だろう。しかし見方を変えて、これを、「まめ人」の「名」を取ったことを単純に喜ぶような人物像から、その「名」を取ったことについて深く内省する人物像への変容と捉えることはできないだろうか。かつて藤裏葉巻において、晴れがましい心持ちで落葉宮と結婚したはずの夕霧が、ここで「いかでかはさありけむと、わが心ながらいにしへだにおもかりけり」と、雲居雁以外に妻をもうけなかつた事への後悔の念を抱くようになることには、「よろしうなりぬる男のかくまがふ方なく一つ所を守らへ」(夕霧四一二)ること、「いかに人笑ふらん」(同)と思い、「六条院の人々を、ともすればめでたきためしに引き出で」(夕霧四二三〇)るようになったこと、つまり、六条院世界への憧れが夕霧の内面で肥大しはじめたことが背景としてある。六条院の栄華を一夫多妻の形態にしか見出し得ないことが、とりもなおさず夕霧の限界を露呈させているともいえようが、しかしながら、その憧憬を深めていく中で、妻を一人に定める

という、「まめ人」らしい紋切り型の態度から脱皮しようとする点に夕霧の変貌を認めるべきだろう。

「まめ人の名をさかしが」つた過去を嫌悪するようになった夕霧は、結果的に「名」にこだわることをやめた。そのことこそが、夕霧に、他者の「名」に言及し、貶めることを厭わなくさせた大きな要因ではなからうか。落葉宮や雲居雁の「名」を追及する姿勢は、六条院世界への憧憬と、それに伴う夕霧の内面の変化によって生み出された態度なのではなからうか。

また、夕霧の「名」を考える上で、父光源氏の「名」も重要な要素である。というのも、夕霧に対する光源氏の訓戒の中に、「名」に関係する以下のような叙述があるためである。

女のことにてなむ、かしこき人、むかしも乱るゝ、ためしありける。さるまじきことに心をつけて、人の名をも立て、みづからもうらみを負ふなむ、つひのほだしとなりける。

(梅枝三 一六八)

梅枝巻、雲居雁との結婚を控えた夕霧に対し、光源氏は、女君の憂き「名」を立てて恨みを負うことが「つひのほだし」となることを言い伝えた。「うらみを負ふ」とは、かつて父桐壺帝による「女のうらみな負ひそ」(葵(一)二九一)

との教訓を守れなかった光源氏の苦い過去に由来する言葉だろう。自分が守れなかった父の教えを息子には必ず守ってほしいと源氏は強く願う。こうした訓戒は、その後、藤裏葉巻や横笛巻でも繰り返して語られており、父の息子に掛ける思いの強さをうかがい知ることが出来る。

しかし、夕霧はそうした願いを見事に裏切った。源氏がそれだけは避けよと教えた「人の名を立て、みづからもうらみを負ふ」事態を、夕霧はそのままに実現させてしまった。そのことを悲しむ父の姿は夕霧巻にきちんと描かれている。

六条院にも聞こしめして、いとおとなしうよろづを思ひしづめ、人の譏り所なく、めやすくて過ぐし給を、面立たしう、わがいにしへすこしあざればみ、あだなる名を取りたまうし面起こしに、うれしうおぼしわたるを、いとほしう、いづ方にも心ぐるしきことのあるべき事、……宿世といふ物のがれわびぬる事なり、ともかくも口入るべきことならず、とおぼす。

(夕霧四 一三三)

息子の皇女との艶聞を耳にした父光源氏は、冷静で、人から非難も受けない、感じの好い息子のことを、「あだなる名」ばかりを集めた己の若き日の汚名を返上してくれる存在と

ばかり思っていたが、そうした希望が打ち砕かれてしまったことをほどなくして知る。源氏は、夕霧と落葉宮の双方の境遇を思いやり、不如意な宿世を嘆くも、その思いを、息子に言い伝えることさえできない。夕霧巻は、父の反省を無下にするという点で、光源氏の物語に組み込まれる側面をも有しているといえるのである。

おわりに

〈家名〉〈悪評〉それぞれの「名」に向き合い、苦しまざるを得なかった女君たちの人生を、落葉宮の上に再度繰り返すことで、物語は、「名」の束縛から抜け出し得ない女君の実情を描き尽くした。また、正妻一人だけを愛するという堅物な姿勢を貫いてきた夕霧は、六条院世界への憧憬を募らせていくにつれて、かつて背負った「まめ人」という「名」に嫌悪感を抱くようになり、それと同時に、他者の「名」を軽視するようにもなる。このことは結果的に、恋にまつわる自らの軽薄な「名」を返上してくれる存在として息子に期待をかけていた父光源氏の願望を打ち砕く結末をも導いてしまうのであった。

しかしそうした父の願望の成就しない展開が、夕霧によって無意識に引き起こされたことなのか、それとも夕霧に

よって確信犯的に導かれた結果なのか、という問題が依然として残ろう。「名」の用例のみでは、確かな結論は導きがたいが、例えば、以下にみる夕霧と花散里との対話などには、そうした息子の父親に対する反抗心が明瞭にあらわれている。

「さてをかしき事は、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、いさ、かあだくしき御心づかひをば、大事とおぼえていましめ申したまふ、しりう事にも聞こえ給めるこそ、さかしだつ人のおのが上知らぬやうにおぼえはべれ」との給へば、「さなむ。常にこの道をしもいましめ仰せらるゝ。さるは、かしこき御教へなうでも、いとよくをさめてはべる心を」とて、げにかしと思ひ給へり。

(夕霧四一四三)

赤裸々に源氏を非難する花散里の姿にも驚かされる叙述である。彼女のいう「さかしだつ人のおのが上知らぬやうにおぼえはべれ」との言葉は、梅枝巻における源氏の訓戒中の言葉「女のことにてなむ、かしこき人、むかしも乱るゝためしありける」をまるで揶揄的に解したかのような言い草だが、それに対する夕霧の返答は対抗意識に満ち溢れたものである。はやく横笛巻においても、光源氏から教えを受けた際に、夕霧は、

さかし、人の上の御教へばかりは心つよげにて、かゝるすきはいでや、と見たてまつり給ふ。(横笛四六三)

と内心密かに反発してもいた。物語第二部における夕霧は、ひとり柏木の死の真相に迫り、落葉宮との情趣豊かな交流を重ねるなど、第一部では見られなかった主体性を発揮しながら、物語の展開に参加していく姿が特徴的だが、光源氏の教えから離反し、自ら恋の道を邁進しようとするのもその一環と思しい。息子の代で「名」の清算を実現させた光源氏の願いをまるで反故にするかのように、女君達の「名」を容赦なく問い詰めていく態度は、夕霧のそうした主体的な行動の一つというべきものではなからうか。女君の「名」を問い詰める姿勢は、父に対する夕霧の対抗意識を暗に体現したものと見做すことができ、それは、物語第二部の持つ、夕霧の変貌ともいうべき特徴の一端なのであった。

※『源氏物語』の本文は新日本古典文学大系本を用い、巻名・巻数・頁数を順に記した。ただし句読点や歴史的仮名遣いなど、適宜表現を改めた箇所がある。

【注】

- (1) 吉岡曠「第二部の成立過程について」(『源氏物語論』、笠間書院、一九七二年)、森一郎「まめ人夕霧」(『源氏物語の世界』第七集、一九八二年)、伊井春樹「夕霧物語の位相―光源氏の晩年を継承する夕霧像―」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識』二三、至文堂、二〇〇二年) など。
- (2) 後藤祥子「皇女の結婚―落葉宮の場合」(『源氏物語の史的空間』、東京大学出版会、一九八六年)
- (3) 小町谷照彦「夕霧の造型と和歌―落葉の宮物語をめぐって―」(『源氏物語の歌ことば表現』、東京大学出版会、一九八四年) が歌言葉に着目した代表的な論考。表現に関しては、卜部美子「夕霧巻についての考察―夕霧と落葉宮の関係の意義を探る」(『島大国文』二八、二〇〇〇年三月)、同「落葉宮の運命「罪」の表現からたどる」(『島大国文』二九、二〇〇一年三月)、三田村雅子「夕霧物語のジェンダー規制」(『国文学 解釈と鑑賞』六九―八、二〇〇四年八月) など。
- (4) 諸岡重明「翁のなにがし守りけんやうに」(『立教大学日本文学』八四、二〇〇〇年七月)、井野葉子「夕霧巻における竹取引用」(『論叢源氏物語』3 引用と想像力)、新典社、二〇〇一年) など。
- (5) 藤村潔「宇治十帖の予告」(『源氏物語の構造』、桜楓社、一

九六六年)

- (6) 篠原昭二「夕霧巻の成立」(『源氏物語の論理』、東京大学出版、一九九二年) 室伏信助「夕霧物語を読む」(『王朝物語史の研究』角川書店、一九九五年)、鈴木日出男「柏木と夕霧」(『光源氏の世界』放送大学教育振興会、一九九四年)、高木和子「夕霧物語から光源氏物語へ」(『源氏物語の思考』、風間書房、二〇〇二年) など。
- (7) 表規矩子「源氏物語第三部の創造」(『国語国文』二七—四、一九五八年四月)、藤村潔(5) 論文、石田穰二「夕霧巻について」(『源氏物語論集』、桜楓社、一九七一年)、伊藤博「夕霧物語の位相」(『源氏物語の原点』、明治書院、一九八〇年)、池田和臣「源氏物語夕霧巻の引用論的解析—反復・変奏の方法、あるいは「身にかふ」夕霧—」(『研究講座源氏物語の視界1(準拠と引用)』新典社、一九九四年) など。
- (8) 秋山虔「源氏物語」一六二—一六三頁(岩波書店、一九六八年)、鈴木日出男「光源氏の道心と愛執」(『源氏物語と源氏以前研究と資料』、武蔵野書院、一九九四年)、日向一雅「源氏物語の世界」一七三—一七四頁(岩波書店、二〇〇四年) など。
- (9) (7) で掲げた諸論
- (10) 河添房江「夕霧」(『新・源氏物語必携』、学燈社、一九九七年)
- (11) 小町谷照彦(11) 論文
- (12) 室伏信助(9) 論文
- (13) 『岩波古語辞典 補訂版』(岩波書店、一九九〇年)
- (14) 岩原真代「落葉宮の浮名と社会環境」(『源氏物語の住環境—物語環境論の視界』、おうふう、二〇〇八年)
- (15) 木谷真理子「光る源氏」の成り立ち」(『国語と国文学』七四—三、一九九七年三月)、河添房江「源氏物語の比喩と象徴」(増田他編『源氏物語研究集成』第四巻、風間書房、一九九九年) など。
- (16) 高木和子「光源氏物語の二つの発端—古代語「名」をてがかりに」(『源氏物語の思考』、風間書房、二〇〇二年)、安藤徹「光源氏の〈名〉」(『源氏物語と物語社会』、森話社、二〇〇六年) など。
- (17) 他に六条御息所の「名」について考究したものに、浅尾広良「葵巻の物の怪致—「名立つ」六条御息所—」(『源氏物語の準拠と系譜』、翰林書房、二〇〇四年) がある。氏は、六条御息所が物の怪となっていくプロセスの中で、「名」の内実が「単なる男女関係の問題」から、故父大臣の御霊を含めた「一族の社会的な評価」にまで発展していると説く。
- (18) 岩原真代(14) 論文にも同様の指摘がある。
- (19) 伊藤博(7) 論文

(20) 小町谷照彦 (3) 論文

(21) 木谷真理子 (15) 論文

(22) 高木和子 (16) 論文

(23) はやく、深沢三千男「夕霧巻ところどころ——齟齬と不如意の世界の展開——」(『源氏物語の探究』十、風間書房、一九八五年) が夕霧冒頭と帚木冒頭の類似性について指摘している。ただし氏は「品行方正の人物という世間の定評を裏切る、はめ外しを予告する点、父子相似る設定が出発点となっているのが面白い。」と述べるにとどまる。

(24) 「まめ」については、拙稿「『伊勢物語』二段と夕霧の恋——「まめ」と呼ばれた人々への視座から——」(『むらさき』五六、二〇一九年) にて考察した。王朝文学において、「まめ人」

の恋は、滑稽な失敗談として描かれることが多い。

(25) 藤裏葉(三)一八五、横笛(四)六三

〔付記〕本稿は、日本文学協会第三九回研究発表大会(二〇一九年年七月七日、於京都女子大学)での口頭発表に基づく。

ご教授頂きました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

